

研究室から――

【東北芸術工科大学】

環境デザイン学科

温井 亨



研究室なしの研究

私は東北芸術工科大学・環境デザイン学科で助手をしているが、研究室という組織には属していない。そこで「研究室から」という本稿のタイトルではあるが、私の研究は「研究室なしの研究」ということになる。つまり、個人で行うことが基本となり、研究室を挙げたの大海戦術は取りにくい。しかしながら、私の研究分野である町並みや、集落の風景の保全では、実測調査などで人手が必要となったり、また私の流儀として、高齢化や後継者難で落ち込んでいる地域を活性化するきっかけとして、若い活力との出会いを仕掛けたいのである。どうしても学生たちの参加が必要となる。そのとき「研究室なし」の身としては、関心のある学生が自発的に集まってくれることに頼むしかない。これは数を集めるにはひと苦労であるが、単位や卒業資格の与奪

とは無縁であるので、逆に先方の人たちからは評判がよいことにもつながる。「ここに来てくれる学生たちは皆気のいい人たちばかり」という声を聞くのもそのためかと思っ

てい。表題の「木匠塾」とは、私の研究、実践活動の場である村山市五十沢地区で昨年からはまた大石田町中心部では今年から始めた活動であるが、「研究室なしの研究」という特徴が、ここではいよいよ強い。これまでも私の研究、

「木匠塾」通し交流 茅葺き屋根、職人技

村山市五十沢・大石田町

実践活動には、他学科の学生も参加してくれていたのだが、木匠塾ではそれが他大学の学生にまで広がった。また、他大学の先生方もいっしょに活動できる場ともなりつつあり、今後に期待している。

木匠塾とは？

木匠塾とは、建築系の大学、専門学校のサマー・スクールで、毎年夏に一週間ほどの合宿を行い、木材を使った製作活動を行っている。既に約十年の歴史があり、これまで東北では角館町、中部では岐阜県の高根村と加子母村、近畿では京都府美山町、奈良県川上村が活動の場であった。現在、大阪府から青森

県までの二十を超える大学、専門学校が参加している。私は一昨年から関わることとなったが、今回、五十沢と大石田でも木匠塾の看板を揚げさせてもらった。木匠塾の意義としては、学生たちが教室を出て地域に入り、地域の視点に立って発想する機会であること、我が国の建築教育でほとんど教えられていない木造建築について学び、実際に木に触れ製作してみる機会であること、偏差値輪切りで貧困な発想に陥りがちな学校間の壁を壊す交流の場であること等が挙げられる。

本年七月七日、九日、村山市と大石田町で本格的に「木匠塾」を始めるに当たり、まず、フォーラムを開いたが、これは年に一回、初めて木匠塾の活動を始めるところで行う催しで、地域の方々との顔合わせ、言わば、お見合いのようなものである。今回のフォーラムでは、全部で十五の大学、専門学校が参加しシンポジウム等を行った。その後、この文章を書いている現在は、合宿をしながらさまざまな製作活動を行っている最中で、まず、八月七日、八日に大石田で鏝絵の講習会、次に八月二十日、二十七日には、村山市五十沢地区で、差し茅やゴミステーションの建設などが進行中である。

村山市五十沢地区での活動

次に、村山市五十沢地区と、大石田町中心部での木匠塾の活動について、それぞれ説明する。村山市五十沢地区は戸数二十一戸の小さな集落であるが、現在でも約八割の世帯が茅葺きの家屋を維持している。また、まわりを山に囲まれ、豊かな里山としての自然も残っている。私は一九九五年より、村山市が



村山市五十沢 茅葺き集落修繕作業



大石田町商店街 鏝絵作成作業

温井 亨 (ぬくい とおる)

東北芸術工科大学環境デザイン学科助手。
1958年東京都保谷市生まれ。

東京大学で風景計画と建築を学ぶ。東孝光建築研究所を経て、イタリア政府給費留学生としてイタリアの都市及び風景計画を研究。長浜市、大石田町の歴史的な中心市街の町づくり、村山市五十沢地区の風景保全にかかわる。1994年、川越市一番街商店街の荻野金物店修復で川越市都市景観ポイント賞受賞。

始めた同集落の保全事業をお手伝いしてきたが、調査報告書の作成後は、学生たちと村に入って、以下のような活動を行っている。
雪下ろし、差し茅、茅刈り、茅場の草刈り、お盆前の道の草刈り、景観に配慮した水路づくり、かじかの放流、そばの種まき、そばの収穫と脱穀、そば打ち、炭焼き、かんじきを履いての冬の山歩き、狸の巣穴掘り、わら細工…。
この中にはボランティア的なものからレクリエーション的なものまで雑多な活動が混じっているが、ボランティア活動は、雪下ろしにせよ茅屋根の手入れにせよ、学生が上るとかえって屋根を傷めてしまう問題もあり、なかなか難しい。
そこで、レクリエーション的なものも含めて、これまでの活動の意義を考えてみると、「交流」という言葉で表せるのではないかと思う。なぜなら、集落と里山の保全には、住民意識が変わる必要があり、それは外部との交流なしには不可能だと思われるからである。

住民の意識では、茅葺きを恥ずかしいと思う意見が多いが、後継者のいない現在の状況を逆転するには、茅葺きのたたずまいに文化的価値を見出し、里山の自然を魅力と捉える価値観の転換が必要であろう。そしてそのためには、外部との交流、また、支援組織がまわりに形成されることが不可欠となる。学生たちとの交流はその第一歩だと思っている。

大石田町中心部での活動

大石田は江戸時代以来職人の町として有名であり、大工、左官は大石田を代表する職人業である。そのうち今年には左官の技、なかでも最も華やかで他ではほとんど見られない、鏝絵という分野に学生が挑戦した。鏝絵とは、鏝を使って描く絵であり、漆喰に顔料を混ぜる、あるいは漆喰でつくるレリーフに、色を付けて造られるものである。
今回はフォーラムで、まず、六枚のパネルに四大学が挑戦し、それを三時間で仕上げるパフォーマンスを行った。また、サマースクールでは二日をかけて、より本格的な講習を受けた。その際、普段は閉じている店蔵を開けてもらい、そこで製作した結果、道行く人も立ち寄り、商店街の人たちとの交流もできた。学生にとっては左官仕事、鏝絵の勉強、そして町並みと町家を学ぶ良い機会であり、町にとっては、商店街活性化と職人業の振興を実践する、最初の一步となったのではないかと考えている。

大石田町中心部は、江戸時代、最上川における内陸最大の河岸であり、現在、町家が並び歴史的町並みの保存が課題となっている。そのためには、文化財としての町並みの保存、商店街の活性化等、さまざまな方面からの取り組みが必要となる。しかしこれまで、計画までではあるが、その先に進まない難があった。そこで、今年度から始まった大石田木匠塾では、学生の若い力が左官組合、大工組合の協力を得て、大石田伝統の鏝絵を学ぶという活動を行った。